巻頭言

幅広い見地から水質汚濁への取り組みを*

江上 信雄**

略 歴

昭和22年 東京帝国大学理学部動物学
科卒業
25年 東京大学講師
39年 放射線医学総合研究所生物
研究部長
45年 東京大学教授
東京大学総合研究資料館長
東京大学理学部長 日本動
物学会会長等歴任
60年 国立公害研究所所長
理学博士 日本動物学会賞
受賞
趣 味 自然観察 プロスポーツ観
戦

いわゆる「研究者」は、研究課題を専門の技術的側面からだけ見て、研究分野を限定しがちである。これは何も水質汚濁研究の分野に限ったことではない。当事者意識から抜け切らずに物を見ると、一般の人々の物の見方と離れた問題に熱中する場合もある。このことは「専門家」としては必要なことではあるが、時としてはちょっと離れた立場から眺めることも意味がある。

手近な一冊の国語辞典で「おたく・汚濁」の項を引いてみると、「末の世になり、悪や不正が横行すること」としか説明がなく、しかもその後に仏教語では「おじょく」と書いてあるだけであった。日常の用語としての汚濁の意味がこのように限られて書かれていることは意外であった。それではと他の辞書を見るとさすがにより広い意味も載っていた。また「すいしつ・水質」というと、もっぱら飲み水のことだと思っている人がいるので、これも同じ辞典をみたところ、「飲料水の品質・成分」としか出ていなかった。水質汚濁という言葉自体のニュアンスも専門家と一般の人との間にギャップが生ずるのかもしれない。

さて読者の中には、御存知の方もあろうが、荒垣秀雄さんの「メダカのいる川」という随筆集がある。この中には自然に対する限り無い愛を綴った珠玉のような文章が多い。生物学の「専門家」として目を通すと、部分的には正確を欠く箇所も気になるが、全編を通してみると美しい自然に対する憧憬にあふれている。目次の中には、「緑を子孫に伝えよう」「水のおいしい国」「調和ある国土緑化」といった項目がある。そのあとがきの一部を抄記しよう。「メダカという小さな魚、子どもの頃どんな小川にもうようよ泳いでいた。水面近くに群をなして……。河に素足ではいると、足をツンツ

ン突っついてくすぐったかった。その感触は今も忘れない。……それが今、子どもに聞いてもあまり知らない。メダカや螢やトンボなどが減びていくような自然環境は人間にとっても住みにくい所になるだろう。人間も自然の恩恵によって生き栄えた生物なのだから。……メダカのような小さな生き物もちゃんと生存できる調和のとれた生態系を保つことは人間の生き延びてゆく道でもある」と。これらの内容を科学的に詮索すれば、メダカは決して清澄な水の象徴とはいえないし、またわが国の在来種であるメダカが減少した原因も決して単純ではない。けれども些々たることは別として、美しい水や景観を求める多くの人々の気持ちは、十分に汲みとることができる。

水質の環境基準については、厳密な科学的、定量的、客観的な方法で定めるのが当然である。しかしこれはいわば必要条件であって、それを満たしさえすれば十分であるかどうかはまた別であろう。複雑な環境問題の一環として水質汚濁を捉える場合には、冷静な技術的な面と共に温かい情緒的な面を幅広い見地から配慮しないと、一般の人々に受け入れられない恐れもある。

宇宙にある数限りない天体の中で、わが地球が生物を育むすばらしい環境を持つのも、多量の水の存在による部分が多い。このような環境に恵まれたこと自体千載一遇以上の偶然に支配されたといえる。我々の存在自体が現在の技術的能力をはるかに越えたものであることと思うと、「専門家」の知恵の限界は明らかで、せめてできうる限り多くの人々の意見・立場をきき、幅広い観点から謙虚に環境の問題に取り組むことが必要であろうと自ら反省している次第である。

* Conservation of Nature and Water Pollution Research,
昭和61年度5月9日受理

** Nobuo Egami, 国立公害研究所所長